

## 慶応4年正月上旬の桑名

西 羽 晃

慶応4年正月元旦（西暦では1868年1月25日）は桑名藩主松平定敬と主力部隊は大坂城に居た。桑名城には前藩主夫人の珠光院貞姫と前藩主の遺児・万之助（後の定教）と2人の姫が居た。桑名藩家老の酒井孫八郎は藩主一家への挨拶のため登城したが、戊辰戦争前夜の非常時なので、会えなかった。彼は新年挨拶に親類を回り、静かな元旦だった。この時に桑名藩の総宰職にあった家老は4人居たが、2人は大坂に居り、孫八郎と沢采女の2人が桑名に居た。孫八郎は数え歳24歳だったが、その後は殆ど一人で桑名藩の難局に立ち向かうことになった。

2日、孫八郎は平服で平常通りに城で勤務して帰宅している。大坂に居た桑名藩の部隊は大坂を出て、京都へ向ったが、その知らせは桑名へは未だ届いていない。3日、孫八郎は気分が少しすぐれず欠勤していたが、午後に急用のため呼び出され、夕方に帰宅。前日に大坂を発った連絡員が大坂の部隊が京都へ向かった情報をもたらした。そのため、桑名からの応援部隊が夕方に出発した。川口の七里の渡し場には厳重な警戒体制が敷かれ、薩摩の武士を取り押さえるように触れが出された。

4日、孫八郎が定刻に弁当を持参して出勤して、夜遅くに帰宅。3日に大坂を出た連絡員が到着したが、まだ委しいことは判らない。春日神社では今年「武運長久開運出世」のお札がよく売れた。

孫八郎は5日もいつもの様に弁当持参で出勤した。非常事態となり、その対応策が次々と触れ出され、緊急の場合は鐘で合図するので、急いで城へ集ること、各自が持っている銃と弾薬を届けること、などです。

孫八郎は6日も同様に弁当持参で出勤したが、情勢が緊迫して帰宅できたのは翌日の午前2時ころです。各自に肩印の布などを配るので取りにくるようにと触れ出され、いよいよ臨戦態勢である。

7日、孫八郎は午前2時ころに帰宅して、定刻に出勤しているから、少し仮眠した程度である。情報は次から次へ入ってくる。そして今夜も徹夜で仕事をし、翌朝の夜明けごろに帰宅した。

8日未明は雪、のち晴れ。孫八郎は夜明けごろ帰宅し、定刻出勤。とても寝る間もありません。前日に大坂を出発した連絡が届き、桑名藩・会津藩をはじめ幕府軍は京都郊外で総崩れとなった情報が入って、桑名は大混乱となった。

孫八郎は9日も夜明けごろに帰宅し、また出勤。2日連続しての徹夜である。

桑名軍が負けた情報は桑名の町内にも広がり、桑名が攻められることを恐れて、町の人も横になって寝られない状況です。中には町から逃げ出す人も現われた。

10日、孫八郎は昨夜から帰宅できず、とうとう3日連続しての徹夜である。藩主の松平定敬が徳川慶喜らと船に乗って大坂を脱出して江戸へ向かったとの情報が届いた。対応策について城内では議論が沸騰した。桑名城を捨てて、江戸へ集り幕府軍と共に戦うという強硬派に対して、相手方は天皇の軍隊である印として「錦の御旗」を持っているので、天皇には抵抗できないから、桑名城を明け渡して降伏しようという恭順派に分かれて、議論は平行線のままで結論がまとまりません。(以下来月に続く)



長寿院にある酒井家墓。

但し孫八郎以後は東京に墓がある。